

バスク人とユダヤ人の間で いかにスペイン人アイデンティティが人種化したか

ジャン=フレデリック・ショブ*
(福崎裕子 訳)

序論 ナチズムが「バスク問題」に介入する

2010年6月16日、ビルバオ市アリアーガ劇場の荘重な舞台上で、400人の人々が『Haur besoetakoia（代子、1970年）』を交代で朗読した¹⁾。1972年に亡くなったバスク語作家ヨン・ミランダ(Jon Mirande)の唯一の小説である。参加者の中には、ビルバオ市長イニャキ・アスクナ(Iñaki Azkuna)、バスク民族主義党(PNV)書記長ヨスネ・アリストンド(Josune Ariztondo)、社会主義者イサベル・セラア(Isabel Celaa)、バスク文学専門家ブランカ・ウルゲル(Blanca Urgell)、ビルバオ司教マリオ・イチェタ(Mario Içeta)がいた。この作家が絶えず情熱的にその大義を支持していたにもかかわらず、死後何十年ものあいだ、スペインのバスク民族主義者たちはミランダの作品にオマージュを捧げたことはなかった。この矛盾した慎重さの理由は、ミランダが過激な反セム主義者であり、第三帝国への敬愛を明らかに表明してきた事実に求められる。実際にその論文のひとつの中で、彼は1328年のナバラ王国エステーリャでのポグロムを、人種に対し脅威となりうるものすべてに対するバスク人種の誇りの表明であると讃えていた。イスラエルがその国民と言語のために挙げた成果の故に、バスク民族主義党がイスラエルに対し抱いている共感が、何故ミランダという熱狂的バスク民族主義者のことが2010年までスペインのバスク地方では沈黙されていたかを物語っている。この年、ビルバオ市アリアーガ劇場で開催された催しは、現地の政治家や知的エリート層の健忘症、シニズム、教養のなさの徴候にすぎない。

ヨン・ミランダは滞在先のパリからバスクの理想を夢見ていたので、バスク人、ブルトン人をフランス領土から分離するというナチスの計画を熱狂的に支持した。彼は親衛隊大将(Obergruppenführer-SS)ヴェルナー・ベスト(Werner Best)博士の思想を実行すべきであると

* Jean-Frédéric Schaub, Centre national de la recherche scientifique

考えていた。博士は、フランスでは1942年ユダヤ人の強制連行を組織し、バスク問題(Basquenfrage)にも熱心に取り組んでいた²⁾。ベスト博士は「バスク人は、ユダヤ人にバスク地方に住み着くことを禁じて、人種上の純粋さを保持している」と認め、彼の将校マンヘン(Manchen)はビアリッツから彼に手紙を書き送り、その中で「イデオロギーの面で、バスク人とドイツ人は同じ人種的原則を持っている。バスク人たちは、新ドイツに自分たちが近い存在であると考えている。彼らは、血脈の中に流れる血に基づいて、民族観を形成している。」と説明している³⁾。

近年になってスペインの一般の人々は、どれほどナチス高官たちがバスク人のケースを人種理論の好例と見なしていたかを理解し始めた。と言うのも、ドイツ人映画監督ヘルベルト・ブリーガー(Herbert Brieger)が1944年に制作した映画『*Im Lande der Basken* (バスクの地で)』が再発見されたことが、スペインに重要な影響をもたらしたのである。この映画は、ナチスのプロパガンダの規則や言語に特有な常套句を使うことで、神話的なバスク民族観を提示する試みであった。映画の中で、ナレーションの声が提起するのは、人種の専門家にとっての中心的な疑問である。「この人はどこから来たのか。誰にもわからない。バベルの塔を作った大工の子孫か、フェニキア人か、アトランティスの人々か、フィンランド人か、モンゴル人か。いずれにせよ、最も一般的に流布している説は、イベリア人の子孫であるというものだ。」⁴⁾

1 あるナショナリズムの人種差別的根拠

バスク問題とナチズムの思い出がこのように交差することは驚くべきことではない。1993年7月にマドリッドで、言葉遊びのような題名の本が出版された。『*Auto de terminación*』である⁵⁾。続けて一語にすれば自決権の意味であるが、このように三語に区切ると「終焉の確認」という意味になる。その著者は、人類学者フアン・アランサディ(Juan Aranzadi)、文献学者ヨン・フアリスティ(Jon Juaristi)、政治ジャーナリストのパチョ・ウンスエタ(Patxo Unzueta)である。三人とも若き日は、独裁者フランコの死まで、E.T.A.(バスクの祖国と平和)組織の活動家かシンパであった人物である。この本を出版したのはアギラル・エルpais(Aguilar-El Pais)社で、日刊紙エル・paisと同様に、出版グループ・プリーサ(PRISA)に属しており、この本がスペイン社会に重要なインパクトを与えることを保証していた。この本の表紙では三つの疑問が提起されている。「反セム主義は民族主義イデオロギーのモデルなのか」「自立がバスク民族主義の希求を満足させることができるか」「交渉によるETAの暴力終結を想像できるか」。実際にこの本の冒頭の何章もが、バスクの政治的イデオロギーの形成にあたり、反セム主義的要素が存在していたことを証明している。ヨン・フアリスティは、「空のゲッター」と題された章において、「(……)バスクの反スペイン主義は、一種の反セム主義の

バスク人とユダヤ人の中でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか（フレデリック・ショブ）

形式であったし、（それが存在する限り）そうあり続けるであろう」と強調している。（129 ページ）このようにして、バスク問題とユダヤ人問題との間の往来が、『*Auto de terminación*』の半分以上を占めていた。当時は、バスク解放の名の下に犯された多くの殺人事件がスペインの人々を震え上がらせていた。1990年には25件、91年には46件、92年には26件の殺人事件が起きている。この時には、バスク州政府首長（*Lehendakari*）ホセ・アントニオ・アルダンサ（José Antonio Ardanza）はバスク民族主義党（PNV）党员でもあり、「アフリカ・エネア協定」（1988年）以来、テロを拒否する全ての政治組織間での対話政策を推進していた。この和解戦略に対抗して、バスク民族主義党の指導者シャビエル・アルサリユス（Xabier Arzalluz）は、政治的アイデンティティの人種概念にもとづく急進的なイデオロギーを擁護した。『*Auto de terminación*』は、政治的議論の転換点に対する一つの解答であった。「1993年に、差別化されたバスク人種の存在が、同様に差別化された政治的権利を要求するために、論拠として再び援用され始めた。」

実際に、1993年2月初め、すなわち同著出版の半年前に、シャビエル・アルサリユスは、トローサ市（ギプスコア県）で開かれた集会で、かなり過激な挑発的発言を行っていた。その際アルサリユスは、血液型の重要性、つまりバスク民族においてはO型でRhマイナス型が大半であることを強調したのである。この血液型がバスク人アイデンティティの定義の中に入り、正統かつ特殊な政治的願望の権利につながっていた。彼は「ヨーロッパでは、人種的に考えて、バスクというひとつのネーションが存在している（……）」と断言していた。また、生物学的分析で、クロマニヨン人の特徴がバスク人の中にしか残存していないことが証明できるとつけ加えている⁶⁾。その後、2000年前後に出現したDNA配列解明が、バスク人アイデンティティの基盤を、血液型という生理学的特徴に置く可能性を葬り去った。しかしその約十年前までは、19世紀の愚論を受け継いだまやかしの生物学的言語を再現する事がまだ可能だったのである。

バスク民族主義党の党首を1980年から2004年まで務め、党の硬派を代表していたシャビエル・アルサリユスは、プロパガンダを行う人物、挑発者、おそろべき弁証法理論家であった。Rhマイナスの論拠がもつ人種差別的な性格について論争が勃発するや否や、アルサリユスは自らが引き起こした嵐を利用した。マドリッドやバルセロナのマスコミが、このような生物学的概念の援用を告発した二日後、彼はバスクの日報紙*Deia*（*Deia*）に記事を出し、自分を誹謗する人々に反論した。反対者たちは、フランコ派ナショナリズムから来る概念「永遠のスペイン」のスポークスマンであると断定したのである。そして彼は、人種差別的とまでは言わずとも、人種的なバスク人アイデンティティ概念を発展させ、1895年バスク民族主義党（PNV）を創立した作家サビノ・アラナ（Sabino Arana）を擁護した⁷⁾。

アラナのバスク民族主義は、鉄鋼業と造船業に惹かれてスペインの他の地方からバスク地方

に来る移民労働者の受入れを拒否することと、この地方の居住者たちの人種的アイデンティティを強調することを基盤にしていた。彼は侵入者たちを「マケトス (*maketos*)」(訳注、バスク語で「混血の人」の蔑称、「あいのこ」)、その社会を「マケテリア (*maketeria*)」、バスク社会に侵入しようとする政治的意志を「マケティスモ (*maketismo*)」と呼んでいる。居住する人々の間にはっきりとした区分を作り、それを永続化させるためには、民族間の厳密な分離を制定しなければならなかった。そのような理由で、彼は結婚の問題を最も重視し、純粋なバスク人はいかなるマケタ (*maketa*) 系の人とも結婚してはならないとした。彼自身、16代遡って血統調査をした上で自分の妻を選んでいて、1893年彼は雑誌を創刊したが、1895年その雑誌に記事を掲載し、こう断言している。

「今日では、多くのバスク家庭がマケトス (*maketos*) やスペイン人と混血になり、自分の国籍の感覚と意識を失っているので、(我々が自由になった時には) 各人が居住を許される権利と場所について、原住民と混血者のあいだの区別を制定しなければならないだろう。しかし、純粋なマケタ (*maketa*) 人種の人々は、たとえ7代前からバスク地方に生まれ、バスク語を話しても、マケト (*maketo*) であり続ける。」⁸⁾

「我々が自由になった時には」という括弧内の表現は、バスク地方が政治的主権を取り戻した場合を意味している。地位的区分(あるいは分離)と居住する権利の制限がここでは語られている。バスク民族への帰属は、バスク地方における家族の存在の歴史的深さによるのではなく、その自然起源がマケタ (*maketa*) なのか、バスクなのかによるのである。社会歴史的また文化的要因や、さらには環境的要因までも民族アイデンティティ定義において否定する点は、サビノ・アラナの著作の中で一貫している。1895年の記事は、過剰に論争的な修辞ではなく、確実に彼の信念の内容そのものである。そのことは、2年前に出された別の記事の抜粋が示している。

「(……) ある場所で生まれたことには、人種の点では、何の意味もないことは明らかである。マダガスカルやダホメでビスカヤ人の両親から生まれた子供は、オラクエタ(訳注バスク州ビスカヤ県ベリス市の一地区)で生まれたのと同様に純血のビスカヤ人である。逆に、ビスカヤ生まれでもスペイン人の子孫は決して純血のビスカヤ人にはならない。」⁹⁾

一方で、アラナはバスク地方に住み着いた「スペイン」やマケタ (*maketa*) 起源の移民の還元不可能な他者性を主張した。他方で、メキシコ、アルゼンチン、キューバや、アメリカ合衆国も含むその他のアメリカ両大陸の共和国に居住するバスク人共同体を味方につけようとした。

バスク人とユダヤ人の中でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか（フレデリック・シヨブ）

この点は極めて重要である。なぜならば、19世紀末の十年間は、クリストファー・コロンブスの初航海400周年直後にあたり、スペインや多くのラテン・アメリカの帝国において、10月12日の祝祭に際し、スペイン「人種」の賞賛が広まった時期であったからだ。従って、スペインが帝国の思い出の中で、人種をめぐる用語でそのネーションを鼓舞していた時、サビノ・アラナにとっては、バスク人種を定義し、区別することが緊急課題であった。すなわち、スペイン人種の賞賛が、アメリカやヨーロッパ在住のバスク人も含めて、強い牽引力を働かせていたのである。この文脈において、全てをスペインとする傾向とバスク側との間には、人種的に相容れない不可能性が存在することをバスク民族主義は強調しなけりならなかった。これはウルトラ反動主義運動内部におけるイデオロギー的また政治的競争である。こうして、人種をめぐる用語でスペイン人アイデンティティを定義しようと望む人々が存在している一方で、スペイン人の定義とはっきりと異なるバスク人であるという事実を、人種によって定義する傾向が展開していった。従って、鏡像のような二つのアプローチが存在していたのである¹⁰⁾。そのような理由から、サビノ・アラナは、1899年の記事で、バスク社会内部での厳密な分離を提案する。

「従って、バスク社会の救済、現在の再生、未来の希望は、あらゆる外国の要素を除外し、顕著なバスク起源の証として、不変の文字で刻まれていないものすべてを、合理的かつ実用的に排除した最も絶対的な孤立を基盤としている事は絶対的に明らかである。」¹¹⁾

アラナの論旨は、政治的大惨事と人種に依じての区別という二つの領域で構成されている。彼は手遅れになる前に警告を発する者たろうと考えている。つまり、純粋なバスク人が、スペインの他の所から来た移民と結婚して、永久に血を混ぜ合わせてしまう前に、ということだ。この状況で彼が人種という言葉を使わなかったとしたら、驚くべきことであっただろう。1894年に彼はこう書いている。

「あなた方の、優れた資質により特異な人種、しかも、隣国のスペイン人種ともフランス人種とも、また世界のいかなる人種とも、一切の接触も親交もないためさらに特異な人種こそが、あなた方のビスカヤの祖国を構成しているものだ。そしてあなたがたは、何らの尊厳もなく、父祖への敬意もなく、あなた方の血をスペインやマケト (*maketo*) の血と混ぜた。あなた方は兄弟となり、ヨーロッパで最もいやしく侮蔑すべき人種の中にとけ込んだ。あなた方は、このいやしいものとなった人種が、祖国の領土において、あなた方の人種にとってかわるようになっている。」¹²⁾

ここで重要な点は、バスク以外のスペイン民族を、「最もいやしく侮蔑すべき人種」として
 いることである。バスク問題とユダヤ人の問題が、アラナの空想の中で結びつくのはこの点に
 においてである。なぜならば、彼が属する断固としたカトリックの伝統の中では、ユダヤ教徒の
 —— またイスラム教徒の —— いやしさが、ヨーロッパの他の民族と比べた時にスペイン民族
 をいやしくするものであり続けているからだ。16世紀以降、スペインに敵対する論争家たち
 は、倦むことなく、この論旨を繰り返してきた。「異端審問のスペインは野蛮である。それは
 その体制が専制であるからだが、また、その人民が、混血の人々、半ユダヤ人、半ムーア人によ
 って構成されているからでもある」。そこでアラナの著作や古い源泉で使われているような
 言い方をすれば、バスク人アイデンティティの擁護の根幹には、ビスカヤ人は決してユダヤ人
 や改宗したイスラム教徒を自らに交わせなかったという確信がある。

「スペイン人種は、ひとつの人種であったことは一度もなく、種々様々な人々の混成か
 らなる形なき産物であるから、根本的性格を持つビスカヤの法則が存在している。それら
 は、ビスカヤの家族が外国人家族と結合する際に感じていた自然な嫌悪感から来るもので
 あり、それは、自らの原初からの特異な人種に対して行うことを多かれ少なかれ意識して
 いるが故に生まれる嫌悪感である。(……) 従って、ユダヤ人やムーア人という言葉がス
 ペインの法律に現れる時には、常に信仰の表現として理解すべきであるのに対し、逆にビ
 スカヤの法律においてそれらの言葉がある際には、宗教ではなく、人種を考えていると解
 釈しうる。」¹³⁾

サビノ・アラナがこう書いていた時期に大流行していたスペイン人種 (raza) の擁護との、
 あの競争原理がここにも見出される。ここでは、スペイン人民が構成する「種々様々な人々の
 混成からなる形なき産物」は、ガスコーニュ人、ナポリ人、アラゴン人、ポルトガル人との結
 婚ではなく、ユダヤ人やイスラム教徒との結婚を指している。アラナにおいては、バスク民族
 の構成におけるユダヤ人とムーア人の排斥には、宗教的な性格は全くなく、人種に基づくもの
 であったことには疑いの余地はない。

2 サビノ・アラナの擁護と顕彰

ほぼ1世紀後、アラナの遠き後継者であるシャビエル・アルサリユスは、すでに引用した
 1993年の記事の中で、アラナの修辞をその時代の典型的なものであるとした。19世紀末には、
 実際に、様々な領域の混同はごく普通のことであった。民族アイデンティティ、人種の特徴、
 言語の相違、文化遺産、政治的伝統が、ヨーロッパ中に広がる民族主義的多弁の中でしばしば

バスク人とユダヤ人之间でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか（フレデリック・シヨブ）

結びつけられている。アルサリユスは、バスク民族主義が急進的人種差別の揺籃となったという非難を反転させ、反撃した。ビスカヤの反ユダヤ・反イスラム教徒的な差別は、15世紀以来スペイン全土に存在した差別主義を實行したに過ぎないと示したのである。この論旨を分析する前に、いかにバスク問題が19世紀から20世紀への転換期に、ユダヤ人問題との関連で作り上げられたかを強調しておくべきであろう。

サビノ・アラナは全く独創的ではなかった。彼の言説は、常套句を使い、熱狂的な色合いをそこにつけ加えたに過ぎない。1911年、アラナの死から10年後に、バスクの学者ルイス・デ・エレイサルデ（Luis de Eleizalde）は、『*Raza, lengua y nación vascas*（バスクの人種、言語、ネーション）』という小著を出し、アラナがイデオロギーの点で遺産として伝統に残したものを明らかにした。

「ビスカヤで、単なる居住者ではなく、市民となるためには、その人種の出身であるか、ムーア人やユダヤ人の階級に属した祖先が一名も存在しないことを証明できる外国人でなければならないという法律が採択された。この法律は、サビノ・アラナ氏が指摘するように、19世紀の大半にわたって有効であった。」¹⁴⁾

ここでは排除すべき要素は、全般的外国人ではなく、改宗したユダヤ人やムーア人の血を引く先祖の不在を証明できない人である。別のいい方をすれば、マケトス（*maketos*）とスペイン人は、他の外国人よりも望ましくないとされている。なぜならば、ユダヤ人やムーア人の血が混じった不純の疑いがあるからである。目的は、スペイン中南部出身のプロレタリアート移民を、「マケテリア（*maketeria*）」への帰属を理由に排除することであった。しかし、イギリス人エンジニアやドイツ人化学者の到来は歓迎したのである。

様々な移住者間の区別は、バスク地方以外のスペイン社会がユダヤ化したという主題に基づいている。この主題は16世紀に端を発する。

「セム族の要素に関しては、今日のスペイン国民の民族形成において、それが及ぼした影響が多大であることをすでに述べた。この影響は、バスク人種には存在しない。この人種はいかなる種類のセム族の侵入も被っていない。ビスカヤ、ギプスコア、ナバラの高地には、ヘブライ民族のいかなる痕跡も存在しない。」¹⁵⁾

バスク人とナバラ人、少なくとも山岳地帯のナバラ人にはセム族の侵入は存在しない。なぜならば、中世にはナバラにもユダヤ人が存在したことを否定するのは困難だったからである。不純の源泉としてのユダヤ人、純粋な民族としてのバスク人、双方の定義にある人種的性格に

は疑いの余地がないことを、次の文章が実によく示している。

「ヘブライ人種に関しては、エウスカディ (Euzkadi) (訳注, バスク語の「バスク」) では、半島の他のところと同様には物事は進まなかった。エプロ川の向こうでは、改宗者たちは、スペイン社会に歓迎され、教会と国家の最高位にまでのぼった、しかし、ナバラでは、改宗者たちは行政や聖職のいくつかの役職や恩恵を望むことはできないとコルテス (Cortes) (訳注, 身分制議会) が定めた。そしてナバラの人々は、絶えず侮蔑的な汚名をつけて彼らの存在を指摘し、どのような形でも彼らと血を混ぜることを恐れ、避けたのである。バスクの平民の最低位の人でも、自分の子供にユダヤ人の乳母の乳を与えることを受け入れることは、不名誉な行為だと感じた。(……)バスク人は、自分の血を外国人と混ぜるという考えに、常に本能的な嫌悪感を抱いてきた。それはあたかも、カトリック信仰の純粋さと十全さを超えて、自分のうち保持すべき最も貴重なものは、太古からの人種の純粋さであるという直感を持っていたかのようだ。確かに、エウスカディでの混血は比較的近年の現象で、割合もわずかである。今日なお、エウスカディで生まれる者の90パーセントが、純粋なバスク人種である。」¹⁶⁾

1904年の講演会で、現地のもう一人の学者マリアノ・アリギタ・イ・ラサ (Mariano Arigita y Lasa) が、バスク地方におけるユダヤ人の存在の問題が、バスク人アイデンティティの未来を決定する際に重要であったことを述べている。

「我々の民族は、一度もユダヤ人を愛したことがなく、社会的な面でユダヤ人とつきあう場合は、金銭的な困難に際して彼らに訴えなければならないという必然の法則のためであった。しかし、ユダヤ人種の資質を支持したこともなければ、一度も自分の血をユダヤ人と混ぜたこともない。そのような混血は常に下劣な状態であると考えてきた。バスク地方においては、何世紀にもわたり、ユダヤの子孫の存在はいかなる影響も及ぼさなかった。習慣に関しても、高貴なバスク地方の出身者のあり方に関しても同様である。バスク地方の社会教育は、高貴さ、武士道、寛大さと、率直さに基づいていた。それらはエウスカリア (バスク性) の第一の長所であり、数えきれない汚らわしい犯罪が我々の地に投げ入れた、あの計算高い成り上がり者たちにはないものである。彼らがここで生活できるのは、単に我々の祖先達の有名な歓待の精神のお蔭による。」¹⁷⁾

このように、エレイサルデにおけるのと同様に、アリギタにおいても、スペイン人とは異なりバスク人は、ユダヤ人からの生理学的要素に基づいた感染を避けることができたという著述

バスク人とユダヤ人の中でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか（フレデリック・シヨブ）

がある。この場合、それは不純な血でも精液でもなく、ユダヤ人乳母の乳である。その乳がバスクの乳児の唇を汚すことはなかったとされている。

「この問題については、バスク人はかくも容赦なく、王たちも権力者たちも、貴族も平民も同じ気持ちを持ち、かくも一致して行動したので、医学的理由や妻たちの出産のために、ユダヤ人男女の役務を援用することがあっても、子供をユダヤ人乳母に委ねるような例はひとつもなかった。それはあたかも、子孫の血がユダヤ女の乳に混じると、血が汚染されると恐れているかのようであった。」¹⁸⁾

3 バスク特殊主義の反セムの系譜

これらの愚論は、19世紀後半にヨーロッパを襲ったナショナリズムの熱狂に負うところが多い。ドイツのフェルキッシュ(völkisch)運動や、アラナのバスク中心主義のようなその具体例は、あからさまに人種差別的である¹⁹⁾。バスクの特異性が断定される場合、その人種的次元は、19世紀の国民国家形成のはるか昔に遡る過去に根を下ろしていた²⁰⁾。16世紀初頭から、バスク地方、カンタブリア、ナバラのピレネー山脈地帯では、住民達は、イスラム教徒侵略者たちとも、ユダヤ人共同体とも、人種を混交して「汚され」ていないと認められていた²¹⁾。これらの地方は、一種の全般的な血の純粋さの恩恵を受けており、重要な点は、それを証明する必要がなかったことである。この利点から、バスク人たちは、「普遍的な貴族性」をその民族全体に関して要求することになった²²⁾。全員が純血であるがゆえに高貴であり、一方、スペインのバスク以外のところでは、血の純粋さを要求できるのは一部の家族だけであった。血の純粋さは、汚らわしい混血の疑いがある家族のかたわらで、自らの系統の高貴さを主張するために不可欠な条件である。バルタサル・デ・エチャベ(Baltasar de Echave)は1607年に、バスク人の「普遍的な貴族性」を次のように定義している。

「他の家族と混じりあい、家族が別の家族になったとしても、これらの土地や館に、たとえ購入してでも、次々と住む者たちは、全員がまとまり、親戚となる。なぜならば、我等の地方は狭く、個人的にも全般的にも、外国民族の人々や、汚れた人々、スペイン小貴族ではない人々と混ざることを受け入れなかったからだ。(……)したがって、その貴族性は実に古いものであるがゆえに、ある人々が言うように、最も高く、最も神聖かつ、最も継続的である。なぜならば、その貴族性は、本当の貴族性だけが持つ要求を保ちつつ、何世紀にも何代にもわたって、再生産し増え続けているのだ。これらの家や土地が、認められた血統と土地の貴族に属しているだけでなく、さらには、我々の地方すべてが、ひと

つの認められた貴族の領地を形成していると言うことができる。それがあまりにも真実であるので、太古の昔からビスカヤやギプスコアの地方出身の祖父母と両親がいると証明できさえすれば、領主である血統貴族であると認める特許状を得ることができるのである。」²³⁾

このような理由で、スペインの他の地方に住む家族は、架空のバスク起源に根ざした偽りの系譜をでっちあげていた。家族の中には、バスク地方に家を購入し、先祖伝来の家として示そうとするものもいた。そのために 1526 年に公布されたビスカヤのフエロ・ヌエボ (*Fuero Nuevo* 新法) 第一篇第十三項の法律は、改宗したユダヤ人の子孫がビスカヤに居住し、不動産を購入することを禁じていた。

「ビスカヤの全ての人々は、純血で高貴な貴族の系統につながっており、ユダヤ人とムーア人で新たに改宗した者及びその系統の子孫は、ビスカヤで暮らすことも住まうこともできないという事実において、王命の高き恩恵を享受するものである。」²⁴⁾

さらに第十四項はこう続く。

「異端審問を恐れるが故に、新たに我々の神聖なるカトリック信仰に改宗したユダヤ人やムーア人また彼らの系統のうちには、平民ではなく貴族であると主張しようと、私の王国やカスティリアの領地から、ビスカヤの領地の都市、町、村で暮し住むためにすでに到来していたり、到来しつつある者たちがいる。それをやめさせないと、神への奉仕、王たる私への奉仕に逆行する損害と不都合が生じかねない。」²⁵⁾

このような現象の存在は、バリャドリッド、グラナダ、セビリアにある異端審問古文書保管所、軍部アーカイブ、高等裁判所貴族部古文書所に保管されている訴訟関連書類により証明される。バスク地方で好まれる姓は、父のファーストネームから来る父称ではなく、自分の系統が地域に深く関わっているのを示すことができる場所にまつわる地名であることが確認されている²⁶⁾。出生地の方が姓よりもはるかに重要なのである。なぜならば、同じ姓はスペインの他の地方にも同様に存在するので、姓ではバスク人であることを示せないからだ。ビスカヤに 1526 年に与えられた特権は、1610 年には隣のギプスコア地方にも拡大される²⁷⁾。

これらの法的措置に伴って、イデオロギー的資料群が生産された。その主要な著者は、エンジニアで文献学者アンドレス・デ・ポサ (Andrés de Poza) 及び²⁸⁾、フアン・マルティネス・デ・サルディビア (Juan Martínez de Zaldívar 1500-1575 頃)、エステバン・デ・ガリバイ (Estéban

バスク人とユダヤ人の中でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか（フレデリック・シヨブ）

de Garibay 1533-1600）という2名の歴史家である。彼らの著作は、バスク人の特異性の理論を形成し、バスク人に権利を付与する根拠となるある純粋さが存在するという推定を更に強化するものである。こうしてアンドレス・デ・ボサはバスク語の起源に関して初めて印刷された論文を書き、そこでは古さを理由にしたバスク人の優越性が強調された。

「ビスカヤの貴族には、起源も始まりもないが、（自分たちが歩く大地と同じくらい古いと言いつけるアテナイ人や、月が空に出現する三千年前に現れたと主張するアルカディア人のように嘘をつくことなく）、ビスカヤ貴族は、族長トバル（訳注、旧約聖書創世記のノアの孫、イベリア人の祖先とされる）から今日まで、その自由、言語、風俗習慣を真に保持してきた。（……）結論として、ビスカヤ地方出身の本来のビスカヤ人は、太古の昔から現在まで、血縁による貴族であることを望むあらゆる理由がある。（私生児や同種の病は例外として）」²⁹⁾

このような論理展開は、当時バスク人の特異な地位を強化するために書かれた論文に特有のものである。こうした修辞が示しているのは、16 - 17世紀の思想と政治制度において、宗教的忠実さと人種の純粋さを人間の経験の二つの別の側面として区別するのが不可能だったということだ。『*Suma de las cosas cantábricas y guipuzcoanas*（カンタブリアおよびギブスコシアの事物大全）』から抜粋したこの一節では、歴史家フアン・マルティネス・デ・サルディビア（Juan Martínez de Zaldivia）が、逆にこの二つの側面がいかに繋がっていたかを示している。

「田舎者や羊飼いですら自慢するその純粋さと系統が故に、彼らは常に異端の人びと、ユダヤ人、ムーア人、その他の不信心の者たちを遠ざけ、キリスト教徒としての名前を常に純粋に保ってきた。たとえユダヤ人が、事業のためにこの地に来て、一つの町には3日、地域全体では13日を超えて滞在する権利がなかった。その結果、子供達はユダヤ人の名を聞くと、人間ではない別の種であるかのようにそれを恐れる。新たに我々の神聖な信仰に改宗した者は誰も彼らの地に住むことはできないという特権を、彼らは今も保持している。」³⁰⁾

啓蒙の世紀になると、バスクの例外主義とそれに伴う特権が、ユダヤ人やイスラム教徒による汚染がないことに由来するというこの仕組みはさらに確立した。18世紀前半に著作を出したイエズス会士神父マヌエル・デ・ララメンディ（Manuel de Larramendi）は、バスクの例外性を証明するために、まず現地のカトリック信仰の純粋さと非妥協性を述べた。

「ムーア人たちはスペインに押し寄せたが、イスラム教はギブスコアには侵入しなかつ

た。キリストの福音書がその地で布教されて以来、ギブスコアはそれを受けとめ、常に使徒伝承のローマン・カトリックの宗教を保持して来た。ギブスコア人で、棄教したり、異端者、ムーア人、ユダヤ人になった例は一例も存在しない。』³¹⁾

しかし、ギブスコアのバスク人の純粋さは、宗教上の忠実さだけで語られるのではなく、問われるのは、確実にバスク的存在の人種的次元である。

「彼らは、スペインで最古のネーションである。(……) 小さなネーションだが、混血がなく、スペインに到来したとされるムーア人、ゴート人、シリング人 (訳注、ヴァンダル族)、ローマ人、ギリシア人、ユダヤ人、カルタゴ人、フェニキア人、ほかの民族の人種 (raza) と混じっていない。小さいが独特で、その血、祖先、系統の中には全く汚れがない。』³²⁾

ララメンディの論旨構成は全てにおいて論理的である。彼は、カスティリアで血の純粋さに関して採択された措置と、汚れなき系譜に属さない臣民が騎士修道会の騎士にならないように監視している騎士修道会評議会の活動を紹介している。彼が強調するのは、これらの措置が、最も際立つ社会的地位に「卑しい人、ムーア人、ユダヤ人、ニグロ、黒人との混血児」が入り込む危険性を取り除くことを目指していることだ。そして、「この危険はギブスコアでは絶対に存在しない。」と述べる³³⁾。

マヌエル・デ・ララメンディは、自身がバスク人であるにもかかわらず、歴史の未来展望におけるユダヤ人の地位について前2世紀間に多数のカスティリヤの著者が作り出してきた論理展開を援用した。実際に、旧約聖書の権威に異論の余地はないので、どのようにしてこの最も高貴な民族であったユダヤ人がその地位から失墜したのか、更には、いかなる点において、終末論的で普遍的な計画を持つカトリック教徒のスペイン人が、いわばこの選民に取って代わったのかを説明する必要があった。ララメンディの考察はバスク人の場合に限って行われているが、同じ図式を使用している。

「この民族が出現してから、キリストの死までの時期、世界中でこれ以上に高貴な血統の民族はいなかった。何故ならば、12ある部族のどれに属していても、各ユダヤ人が、自分の部族の起源と族長に遡って、何の混乱もなくその貴族性と祖先を証明することができたからだ。どの部族も異民族と混じってはいなかった。それは厳しく禁じられていたからであり、他の部族との混血も禁じられていた。その結果、富めるものも貧しきものも、有力者も庶民も、聖職者も世俗の人も、裁判官も職人も、全員が等しく血統貴族であった。

バスク人とユダヤ人の中でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか（フレデリック・シヨブ）

というのも、全員が同様の確実さと適切さで、その部族の根源まで、ヤコブ、イサク、アブラハム、その他の族長まで、アダムにまで至る自分の系譜を示すことができたのだ。しかもそこには聖書がその真性を証明しているという利点があった。]³⁴⁾

バスクの政治的実体の法的定義について 1749 年に書かれた論文の中で、法律家ペドロ・デ・フォンテチャ・イ・サラサル（Pedro de Fontecha y Salazar）は、ヌエボ・フエロ（*Nuevo Fuero* 新法）で、改宗者の子孫がバスク地域に恒常的に居住することを禁じた条項を再び取りあげている。その語り口は、16 世紀初頭の修辞法から何らの距離もない。

「住民たちの毅然たる態度が昔から有名なビスカヤの領地は、その地出身の者たちから認められた著名な貴族の地であるから、かくも卑しく、汚らわしく、下卑た出自の人々が一緒に住むことを彼らが受け入れるとしたら、屈辱に感じるだろう。なぜならば、全ての民族の中で、ユダヤ人とムーア人の祖先と子孫には、いかなる貴族もおらず、貴族になることはできないことがよく知られているからだ。そして彼らは、自身、両親、祖父母のいずれかが改宗していても、その信仰には満足せず、王に忠誠を示さず、神や人間に対する大逆の罪を犯す裏切り者であって、彼らの会話やコミュニケーションは、住民に多大な害を及ぼすであろうことが、経験から証明されている。]³⁵⁾

このように、バスクのアイデンティティ構築の根源には、16 世紀初めに遡るテキストの伝統があるが、その後の継続性はない。この知的系譜学は、ヘルダーの反普遍主義にも、ロマン主義のネーションの概念にも負うものを持たない。ナポレオンの侵略と、のちのドン・カルロス擁護の 3 度の内戦が、バスクの特殊主義から分離要求への移行を助長し、早急化したと言える程度である。それは 19 世紀スペインにおける自由主義の進行への解答としてであった³⁶⁾。

シャビエル・アルサリユスは、すでに引用した 1993 年の論文において、サビノ・アラナの人種主義と血の純粋さを支持する者たちに対する視線を変えることを提案していた。良き歴史家なら誰もがするように、アルサリユスは、アラナの言語を当時の政治文化に位置付けている。

「サビノ・アラナは、当時スペインで流行していた“国籍の原則”をバスク地方に適用したに過ぎない。その結果、姓に関する取り決めは、元々は血の純粋さについての“スペインの”要求に端を発しており、バスクの傲慢さが起源ではない。カスティリア法が要求する“地位”を尊重するために、フエロ（*Fuero*）ではユダヤ人、ムーア人やその他の不純な血の人々の居住を禁止していたのである。」

この文章は、彼の論文の戦略的な要点である。この段落では次のことが述べられている。16世紀に、バスクの人々は、スペイン当局が改宗者の子孫を差別したことを利用した。血の純粋さという身分規定を想定することで、スペインの至る所で排除すべき要素を指定し、事実上、バスク、ナバラ、カンタブリアを、スペイン全体に対して血の純粋さを供給できる貯蔵庫として指定したのである。その貯蔵庫は全ての人に役立つ、純粋さの源泉として、バスク人やカンタブリア人だけではなく全ての人によって認められている。この点では、シャビエル・アルサリュスの論旨は正確である。バスク地方が人種差別の場となったのは、スペインの他の地方から来た純粋さの証明要求に答えてのことである。

4 バスクの純粋性とスペインの浄化

こうしてバスクのアイデンティティ構築は、ユダヤ人やイスラム教徒による内部汚染を避けることができなかったスペイン人民とは逆に、バスクは人種的には純粋であるという論旨に基づいてきた。しかし、19・20世紀において、反セム主義は、バスクの要求の限界の内部に押しとどめられたと断定することは誤りであろう。現代スペインは、おそらく、いわゆる「ユダヤ人なき反セム主義」の見事な例を提供しているのではないだろうか。19世紀から20世紀前半までのスペインも、国際的に発展した人種差別思想から離れてはいなかった。ジョシュア・グード (Joshua Goode) が、現代スペインの人種思想に関する研究の中でこう指摘している。

「ネーションは精神性、伝統、歴史から作られ、アイデンティティの要素は物理的に何千年前にも遡ってたどることができるという近代生物学の確信がそこに付け加わる。このようにしてできたネーションの概念が、19世紀末から20世紀初めのスペインの知識人たちの間では、ライトモチーフであり続ける。」³⁷⁾

実際に、19世紀末、考古学、物理人類学、進化論などをめぐるスペインの学術的議論は、国際的な議論とは無縁ではなかった。スペインの学者たちは、世界の民族の起源に関する国際会議に参加していた。カンタブリアのアルタミラ洞窟壁画の発見やバスク人の起源の神秘は、その際、多くの人類学的議論の中心に立つことができる機会をスペインの学者たちに提供したのだった³⁸⁾。かつての奴隷制度社会や、アフリカ、アジアのヨーロッパ植民地帝国で起きていたこととは逆に、スペインの人種思想は、スペイン社会そのものの構成に集中していた。ジョシュア・グードによれば、

「スペインの19世紀は、内戦、政治的また軍事的蜂起、慢性的な地方問題の多い複雑な

バスク人とユダヤ人の中でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか（フレデリック・ショブ）

ものであったために、人種の思想家たちは外敵よりもむしろ内側の敵に懸念を持つことになった。」³⁹⁾

ここで現代スペインの反セム主義の歴史を細かく語ることはしないが、すでにいくつもの研究が、このような現象をすでに明らかにしている⁴⁰⁾。逆に、この場で注意喚起できるのは、このユダヤ嫌悪の中に、16世紀、17世紀の論旨構成から借用した主題が残存し続けていることである。1936年の内戦に先立つ10年間には、多くのイデオロギー上の紛争が起きた。保守派の間では、ユダヤ人問題が強迫観念となった。『シオンの議定書』は、1932年から1936年の間に12回も再版され、フランコ体制成立後も再版された⁴¹⁾。このように、もたらされた解答がナチスのモデルとは異なっている、人種問題は常に公に提起されたのである⁴²⁾。内戦の間、医学の、より厳密には精神病学の著作において、人種の用語でスペイン社会を襲っているこの危機を理解しようと試みがなされた⁴³⁾。多数の著者がマルクス主義信奉を変性精神病として描き、この病の発展を促す生理的土壌を特定しようとしていた。鍵となるものは、スペインの長い歴史から受け継いだ人種の混成の中にある。精神科医アントニオ・バジェホ・ナヘラ（Antonio Vallejo Nagera）がそれをこのように著述している。

「レコンキスタの時代同様に現在も、我々、スペイン・ローマ・ゴート人は、ユダヤ・ムーア人と戦っている。純粋な人種の根幹と、雑種との戦いである。（……）スペインのマルクス主義者の人種の根幹は、ユダヤ・ムーア人であり、混血であるので、純粋なセム族である海外のマルクス主義者とは心理的に異なっている。」⁴⁴⁾

スペイン国民が、一見統一されているように見えても実際には相入れない二つの陣営に分かれているのは、ユダヤ人とムーア人の同化が虚偽であるからだとの著者は述べている。

「コンベルソス（conversos）と呼ばれる人々の改宗は、見せかけのもので、都合と状況への適応に導かれたのだった。（……）キリスト教への従属は、この人種の真髄を変化させることはなく、シオンの人々（sionita）の先祖伝来の心理、典型的な特徴である貪欲、嘘、悪趣味、意地悪さを変えなかった。（……）そして、共和制という扮装の下に革命が勃発した時、改宗者はその目的を明らかにする。キリスト教社会の根本的な結びつきを解体し、殺し、盗み、強姦し、あらゆる種類の下劣な行為を行ったのである。」

もう一人の有名な精神科医フアン・ホセ・ロペス・イボル（Juan José López Ibor）は、逆に、スペイン国民の健全な部分の英雄主義の問題について考えた。フランコを祖国の救済者とみな

していた人々のことである。彼は、善良なスペイン人が、共和制とマルクス主義の毒に抵抗するための源泉を、どこに見つけていたのかを考察した。その際、彼もまた、明らかな人種学的用語を使用した。

「人種的かつ社会的要因がそこに影響を及ぼしたことは疑いの余地もない。私からすると、『スペイン人の精神的貯え』という表現は神話ではないと確信している。逆境の中にも彼らをまっとうであり続けさせる何かが存在している。恐らく、特殊な生物学的条件——人種——、恐らく彼らの個人的構造であろう。」⁴⁵⁾

このようなイデオロギー的雑感は、独裁制初期のフランコ派プロパガンダの中に再び出現した。それを証明しているのが、1939年5月19日、彼の勝利を祝う大パレードの日にマドリードでフランコが行った演説である。

「ユダヤ教、フリー・メーソン、マルクス主義は、ロシアのコミンテルンの指令に従って人民戦線の指導者たちが国民の身体に植えつけた接ぎ木であった。誤った幻想を持たないようにしよう。ユダヤの精神は、大資本とマルクス主義の結びつきを可能にし、反スペイン革命とかくも見事に通じ合っており、1日にして根絶することができない。なぜなら、その精神は多くの人々の意識の奥底で脈動しているからだ。」⁴⁶⁾

人々の意識の奥で脈動しているユダヤ教を1日にして根絶できないという考えがここに再来している。これは、15世紀末に宗教裁判所の創設を導いた思想の完璧な引き写しである。宗教裁判所という制度設置の原動力となったのは、ユダヤ教とイスラム教は、自ら進んで、あるいは強制的にキリスト教に改宗した家族の心の中で、脈動し続けている可能性があるという疑いであった。

3年間の内戦で疲弊し、世界大戦からは遠ざけられていたスペイン社会は、ユダヤ民族が比類なき殲滅の犠牲となったという意識を、ほかのヨーロッパの国々のように持っていなかった。このようにスペイン社会が世界大戦から遠ざけられていたという事実を最も明確に証明しているのは、反セム主義の理解において、戦前と戦後では感受性の断絶がほぼ存在しないことである。フランコ体制は、国連加入を目指して、徐々に公的言説から反セム主義的言及を排除して行った。しかし、一例をとると、それでも1952年にはルイス・マルキナ (Luis Marquina) 監督の『Amaya o los Vascos (アマヤあるいはバスク人)』が製作された⁴⁷⁾。この映画は作家フランシスコ・ナバロ・ピリヤスラダ (Francisco Navarro Villoslada) によって1877年に出版された小説『Amaya o los vasco en el siglo VIII (アマヤあるいは8世紀のバスク人)』を脚色したもので

バスク人とユダヤ人の中でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか（フレデリック・ショブ）

ある⁴⁸⁾。ドン・カルロス絶対王政擁護派で、ナバラの伝統主義者であるこの作家は、バスク民族主義の先史を描いている。この小説では、8世紀イスラム教徒侵略の際ナバラの——その延長としてスペインの——光景が、4種類の民族に区別されて語られている。ヴィジゴート人（すなわち、抵抗できないスペイン）、バスク人（すなわち、ムーア人の支配を逃れる民族）、アフリカから到来したイスラム教徒のムーア人、そしてユダヤ人である。ユダヤ人は、イスラム教が勝利する方が自分の利益にかなうので、受け入れ国を裏切る。マルキナの映画では、パンプローナのユダヤ人たちの高等法院を描く場面は、ファイト・ハーラン（Veit Harlan）の『Jud Süß（ユダヤ人ジュス）』のようなナチス製作映画にふさわしいほどだ⁴⁹⁾。映画の最後の場面では、バスク・ナバラの人々が、与えられた楽しいお祭りのように、裏切り者のユダヤ人をパンプローナの町で追いかける。このラストがあるのは、イスラム教徒のヴィジゴート族に対する勝利という全般的な文脈において、ユダヤ人はイスラム教に仕えるようになり、イスラム教に抵抗できる唯一の民族バスク人に被害を与えるためなら何でもすると考えられていたからである。映画は、ユダヤ人とバスク人との対立が、スペイン全体の歴史上のその後を決定したことを示している。別の時代の反セム主義を表現しているかのようなこの映画が、フランコ政府とアイゼンハワー大統領政府との最初の交渉と同時期に製作されたことに注目したい。その交渉の結果、1953年のマドリード協定が締結され、スペインのユネスコ加入が認められたのである⁵⁰⁾。

5 フランコ体制を超えて

1930年代と40年代のイデオロギーの痕跡がフランコ体制の枠組みの中に残っていたことは、驚くには値しない。逆に、伝統的な反セム主義が、亡命したスペイン共和派知識人層によって表明されたことは驚くべきである。もっとも有名なのは、1962年から71年までスペイン共和国亡命政府の首相を務めた中世史家クラウディオ・サンチェス・アルボルノス（Claudio Sánchez Albornoz）の場合である⁵¹⁾。プエノス・アイレスで1957年に彼が出版した本『スペイン、歴史の謎』の中で、彼は、3年前にメキシコで出されたアメリコ・カストロ（Américo Castro）の『スペインの歴史的現実』に対する返答を行っている。カストロは、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒の諸民族がイベリア半島に共存・対決し、その交錯の影響の結果がスペインの特異性であるとしていた。この立場に反して、サンチェス・アルボルノスは、スペインのアイデンティティは、ヴィジゴートの要素を起源とするものとし、イスラム教的次元や、特にユダヤ教的次元を、スペイン性の形成プロセスの余白や、さらには外部に押しやっている。サンチェス・アルボルノスの著書は、現代スペイン社会でどの程度なら反セム主義が受け入れられると判断されるのかを明らかにするものである。スペインで1973年に出版された版には、

この後に引用するような文章が多数見られる。最初の文章は、前に取り上げたフランコの演説を正しいとするかのように見え、15世紀に改宗したユダヤ人たちは、宗教を変えることを受け入れた後も、実際には気質を変えなかったと主張している。

「改宗者たちの大半は、自らの信仰に忠実であり続けた。1日にして自分の気質の習慣は変えなかったこと、貸付、税、取引の商売への好みを断念しなかったことは明らかである。そして新たなキリスト教徒という資格の下で、生活様式も信条も変えずに、古くからのキリスト教徒と同じ権利や特権を獲得した。15世紀のスペイン国民は、嫌われているユダヤ人が以前同様に金をゆすり、搾取を続けていることを確認できたのである。しかもそれを、もはや社会的枠組みの外からだけではなく、内部からも行っていた。偽りの信仰の兄弟たちは、王の下や、町の統治の場で彼らが占めていた指導的地位から、スペイン人を統治することができるようになったのである。」⁵²⁾

この抜粋の中で、共和派の歴史家は、15世紀、16世紀の血の純粹さの地位を奨励していた人々や、宗教裁判官たちがコンベルソス (conversos) に対し行っていたような非難を繰り返している。そこには全てが含まれている。改宗の不正直な性格、都市や王国で権力のある地位に就くために、キリスト教徒という地位を不当に使用していることである。さらに、彼は非難を突き進め、スペインとそのユダヤ人たちとの関係史の総括を行った。彼は、同様の強度を持った二種類の迫害の歴史を対称的に作り出した。

「ユダヤ人は、スパイ行為から軍事計画への資金提供まで、彼らのなしえたあらゆる活動において、しかもスペイン史上の悲劇的かつ決定的な瞬間に、スペインに対して害を及ぼして来た。それを細かく検討する日が来て、ユダヤ人がスペイン的なもの全てに対してどれほど激しい敵意を常に持っていたかを把握する時には、なぜ私が清算がなされたと書くことができたのか理解されるだろう。ユダヤ人とその子孫、改宗者に対して我々が行った迫害を一方に、ユダヤ人が中世にスペイン国民に対してなした搾取、スペインを離れることでスペインにユダヤ人が残した暗い遺産、追放後にユダヤ人が行った報復をもう一方に置けば、全ての均衡が取れる。」⁵³⁾

この文章の影響力をはかるには、執筆がナチスの強制収容所開設の12年後であり、出版から30年近く経った後にスペインでは再刊されたことを思い出すべきである。この著者の反セム主義がいかに強固なものかを示す兆候である。または、1938年から45年までヨーロッパを震撼させたものに対してスペインが完全に耳を閉ざしていたことの証だろうか。あるいは双方

バスク人とユダヤ人の中でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか（フレデリック・ショブ）

であろう。

独裁政権崩壊後、実際にスペインでは、抑圧されていたユダヤ人の記憶が再び蘇った。幻想、架空の思い出、消滅したユダヤ世界と和解したいという欲望、フランコ体制のカトリック・ナショナリズム（恐らくは親アラブ主義すらそこにはある）の真逆としてのユダヤ教に繋がりたいという意志などが、そこには混ざりあっていた。歴史家ダニエル・ロザンバール（Danielle Rozenberg）の証言は示唆深い。

「多くのスペイン人が、今日、自分の村や地方の、民族の交錯や、自分の姓の起源について考えている。イベリア半島のユダヤ人共同体は、この問題に関してしばしば相談を受ける。そうして、ユダヤ人の祖先がいるという仮定を肯定する、または否定するような要素がない場合、多くの人々は、自分にはユダヤ人の祖先がいると好んで想像する。」⁵⁴⁾

しかし、フランコ死後には広まっていたにせよ、このような幻想は、同時代の現代性を反映したものではなかった。というのもスペインでは、ホロコーストと第二次世界大戦の記憶は、他のどのヨーロッパの国よりもはるかに些細な位置しか占めていなかった。この点では、欧州共同体加盟（1986年）直前のスペインは、ポーランドやルーマニアよりも、フランスから遠いところにあった。現代スペインにおけるセファルディム忘却に関する研究の中でアレハンドロ・パウエル（Alejandro Bauer）はそれを強調している。

「スペインがようやくフランコ独裁支配を脱出した時、民主主義が国内で再構築されたが、それは、アウシュヴィッツの記憶が中心的な位置を占める、ヨーロッパの価値体系の余白においてであった。」⁵⁵⁾

マーヴィン・チョムスキー（Marvin Chomsky）のテレビドラマ『ホロコースト 戦争と家族』が1979年6月に放送されたことは、スペインに多大な衝撃をもたらした。30年以上にわたる沈黙に雷鳴が轟いたからである。1979年6月29日の第5話の放送日に、ネオ・ナチ組織セダーデ（CEDADE スペイン・ヨーロッパ友好協会）はポスター・キャンペーンを行い、このドラマを告発した⁵⁶⁾。この組織はコミュニケを出し、「600万人の死者という神話」に言及し、スペインのテレビ局が、イスラエル国家をスペインが承認するよう世論を準備するために、『ホロコースト』を放映していると非難した。フランコ体制に忠実なネオ・ナチは、イスラエルとの国交樹立に反対していたのである。西ヨーロッパの全諸国と、ソ連陣営の諸国が1948年から49年にかけてイスラエルを承認した。（ただし、そのうちいくつかの国は第三次中東戦争（6日戦争）後に国交を断絶した。）スペインだけがイスラエルを承認していなかった。結局は欧州共

同体に加盟した年に、フィリペ・ゴンサレスの社会主義政権が一步を踏み出し、1986年にイスラエルを承認した。

この連続ドラマは1978年秋に、スペイン国营テレビ *Televisión Española* が買い入れ、79年1月に放映されるはずだった。しかし、この放映は無期延期された。日刊紙エル・pais (*El País*) の記事がその延期について解説した。記事で使用されている用語は、反セム主義言語が存続していることを彷彿とさせ、民主主義国の中道左派の新聞で次のような用語が使われている点には驚くべきものがある。

「今回放映延期の決定がなされたのは、『QB VII』（訳注、ナチスの人体実験に関する1974年アメリカのテレビ・ミニ・シリーズ。77年日本での民放放映時の邦題は『衝撃の告発！QBセブン』）が起こした論争に起因する模様である。同シリーズはシオニストのプロパガンダとみなされ、ユダヤ人社会が擁護している。『QB VII』と全く同様に『ホロコースト』も、北アメリカの映画産業に占めるユダヤ資本の権力の紛れなき証である」⁵⁷⁾

論調はネオナチ・グループであるセダーデのものとはかけ離れているが、『シオンの議定書』から派生した文献の論調とは、さして異なっていない⁵⁸⁾。

今日、イスラエルの問題とユダヤ人の問題は、公的な議論の中で完全に切り離すことはできない。こうして、1993年の書籍『*Auto de terminación*』の著者たちは、のちに仲違いするが、それはバスク問題を巡ってではなく、ユダヤ教との関係に関してであった。文献学者にして詩人、ついでマドリッド国立図書館長になったヨン・フアリスティが、ユダヤ教に改宗したからである。オピニオン・リーダーとして彼は、イスラエル国家の存在と存続を擁護した。彼が行ったのは、世論の大半がイスラエルに対して批判と敵対の中間の態度を取り、パレスティナの大義に強い共感を表明しているスペインの文脈においてである。ヨン・フアリスティをユダヤ人にした内的な動機がいかなるものであれ（それに関して彼はしばしば明言を避けてきた）、ビルバオのバスク・ブルジョワジーの息子にして、E.T.A.の元活動家が、ユダヤ人アイデンティティを獲得したことは、その出自や経歴を鑑みて理解しなければならないだろう。この状況でユダヤ人になることは、バスクの排他主義の最も深く、最も秘密の中心に挑むこととなった。それは、5世紀にわたる幻想、ユダヤ人の要素が不在であるという事実に基づくバスクの純粋さの主張を、あざ笑う行為であった。社会人類学教授ファン・アランサディは、バスクのアイデンティティの神話的形成に関する複数の著書の中で、ユダヤ人問題を二つの全く異なる角度から観察している。ヨン・フアリスティと同様に、彼も、バスクのアイデンティティ生成において、血の純粋さという幻想が重要性を持ったことを忘れずに強調している。しかし、彼は、カトリック教徒バスク人の、民族的・宗教的構築は、すでに16世紀から選民思想をモ

バスク人とユダヤ人の中でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか（フレデリック・シヨブ）

デルになされたことも強調する。そこで、バスクの妄想とシオニズムの良識の欠如との間には、並行した歴史が打ち立てられると提案し、双方を同じ論争的激しきで非難している。実際に、この両者の比較は、イベリア半島諸国の知的議論においては、すでに古い歴史を持っていた。異端審問の教義的非妥協性と、血の純粋さというイデオロギーは、確かに改宗したユダヤ人とムーア人の子孫を、優先的に大量的のとして攻撃した。しかし、宗教的非妥協性と、混血拒否は、ユダヤ世界から来た社会的メカニズムと規範を、スペインのキリスト教社会に移転したものとしばしば解釈されてきたのである。それは、フランコ時代の最も反動的なスペインの歴史記述では紋切り型ですらあった。その歴史記述では、異端審問の有用性が政治的・精神的な統一の要因であるとし、その暴力性は、ユダヤの遺産であると解釈されていた。いずれにせよ、ファン・アランサディは、イスラエル歴代政府の政策をしばしば告発してきた。シオニズムを、民族・宗教アイデンティティに基づく政治現象として、彼は認容せず、それは、バスクの合法的組織やテロ組織が持つ、人種的民族主義と同じくらい嫌悪すべきものであるとしている。

この二人の高名なバスク知識人間の見解の相違は、和解不可能なものとなった。フランコ政権後のスペインにかくもひどく打撃を与えた革新的・暴力的民族主義に対する闘争の中で仲間であった関係が、ユダヤ問題において崩壊したことは印象深いだが、驚きではない。ユダヤ問題は、全体としてのスペインとバスク地方のスペインの双方で、1492年以降のスペインにつきまとい続けている問題だからである。

結論 スペインのナショナリズムの急進的形式としてのバスクのナショナリズム

このように、現代スペインにおいて、人種主義的次元を含むバスクのナショナリズムの民族的本質主義は例外ではない。現在におけるその論証法は、16世紀に遡る歴史的援用と全く同様に、スペインの他地域の現在の言説とほぼ同じものである。中世末期のスペイン王国の形成は、宗教的・人種の基準に応じた社会の調整に基づくものであった。カトリックの非妥協性、血の純粋さへの執着、強迫観念にもなる程の血統への忠誠、名誉の規則がそれらの基準である。このような特徴によって、バスクの普遍的貴族性への要求も、スペイン全体の社会階級や人種の区分も、同様に定義することができる。人類学者クリスティアーネ・スタラエルト（Christiane Stallaert）が強調しているように、バスク地方が古きキリスト教的避難所であるという考え方は、新たなキリスト教徒、すなわち改宗者の子孫が、スペイン全土と南北アメリカに到るまで、差別の犠牲になっていた⁵⁹⁾という理由でしか、意味を持つことができなかったのである。バスクとスペインという二つの現象は、16世紀以来、和声をなしてきた。そのようなバスクのナショナリズムの悲劇は、スペインのナショナリズムと自らを区別することができな

いことにある。同じ先入観, 同じ価値を持ち, 血の純粋さに基づく同じ歴史と同じカトリック非妥協性に根ざしている。同じ反動的な寝わらの上で生まれた双子の競争であり, シャム双生児の競争ですらある。

註

- 1) Eva Larrauri, « Saizarbitoria en voz alta », *El País, País Vasco*, 2010年6月17日
https://elpais.com/diario/2011/06/17/paisvasco/1308339622_850215.html
- 2) Ulrich Herbert, Werner Best. *Un nazi de l'ombre* (1903-1989), Paris, Tallandier, 2010, pp. 290-293.
- 3) Santiago de Pablo, Teresa Sandoval, « *Im Lande der Basken* (1944). El País Vasco visto por el cine nazi », *Estudios Vascos, Sancho el Sabio*, 29, 2008, 157-197.
- 4) Santiago de Pablo, Teresa Sandoval, 同上
- 5) Juan Aranzadi, Jon Juaristi, Patxo Unzueta, *Auto de terminación : (raza, nación y violencia en el País Vasco)*, Madrid, Aguilar-El País, 1993.
- 6) « Arzalluz : "En Europa, étnicamente hablando, si hay una nación, es Euskadi" », *El País*, 1993年2月7日 ;
https://elpais.com/diario/1993/02/07/espana/729039610_850215.html
- 7) Antonio Elorza, *Tras la huella de Sabino Arana : los orígenes del nacionalismo vasco*, Madrid, Temas de Hoy, 2005.
- 8) Sabino Arana, "Maketeria y maketismo", *Bizkaitarra*, 1895年2月2日
- 9) *Bizkaitarra*, 1893年12月10日
- 10) José Alvarez Junco, *Mater Dolorosa : la idea de España en el siglo XIX*, Taurus, 2001, p. 269
- 11) Sabino Arana, "Extranjerización", *El Correo Vasco*, 1899年8月10日
- 12) Sabino Arana, "Nuestra voz", *Bizkaitarra*, 1894年9月30日
- 13) Juan Aranzadi, *El escudo de Arquíloco. Sobre mesías, mártires y terroristas*, vol. 1 Sangre vasca, Madrid, A. Machado Libros, 2001, p. 230.
- 14) Luis de Eleizalde, *Raza, lengua y nación vascas (A propósito de unos artículos publicados en el Debate de Madrid, por el Señor Don Fernando de Antón del Olmet, bajo el título El nacionalismo vasco y los orígenes de la raza vascongada)*, Bilbao, Eléxpuru Hermanos, 1911, p. 44.
- 15) Luis de Eleizalde, *op. cit.*, p. 41.
- 16) Luis de Eleizalde, *op. cit.*, pp. 44-45.
- 17) Mariano Arigita y Lasa, *Los Judíos en el País Vasco : su influencia social, religiosa y política*, Pampelune, García, 1908, pp. 21-22.
- 18) Mariano Arigita y Lasa, *op. cit.*, p. 47
- 19) George L. Mosse, *Les racines intellectuelles du Troisième Reich. La crise de l'idéologie allemande*, Paris, Seuil, 2008, pp. 165-193.
- 20) Mikel Azurmendi, *Y se limpie aquella tierra. Limpieza étnica y de sangre en el País Vasco (siglos XVI-XVIII)*, Madrid, Taurus, 2000.

- 21) Juan Aranzadi, « Raza, linaje, familia y casa-solar en el Pais Vasco », *Hispania*, 61-3, 2001, pp. 879-906; José Maria Portillo Valdés, « Republica de hidalgos. Dimension politica de la hidalguia universal entre Vizcaya y Guipuzcoa », in *La Lucha de bandos en el país Vasco : de los Parientes Mayores La a la Hidalguía Universal : Guipúzcoa, de los bandos a la provincia (siglos XIV a XVI)*, José Ramón Díaz de Durana Ortiz de Urbina ed., Bilbao, Universidad del Pais Vasco, 1998, p. 425-437.
- 22) Jon Arrieta, « Nobles, libres e iguales, pero mercaderes, ferrones... y frailes. En torno a la historiografía sobre la hidalguía universal », *Anuario de Historia del Derecho Español*, LXXXIV, 2014, pp. 799-842.
- 23) Baltasar de Echave, *Discursos de la antigüedad de la lengua cantabra bascongada*, Mexico, Henrico Martinez, 1607, F 66v.
- 24) *Fuero Nuevo de Vizcaya* (1526), Durango, Leopoldo Zugaza, 1976, p. 11.
- 25) *Ibid.*, pp. 12-13.
- 26) Juan Aranzadi, *El escudo de Arquiloco. Sobre mesías, mártires y terroristas*, vol. 1 Sangre vasca, Madrid, A. Machado Libros, 2001, pp. 243-244.
- 27) Pablo Fernández Albaladejo, José María Portillo Valdés, « Hidalguía, fueros y constitución política : el caso de Guipúzcoa », in *Hidalgos & hidalguía dans l'Espagne des XVIe-XVIIIe siècles. Théories, pratiques et représentations*, Paris, Editions du CNRS, 1989, pp. 149-165.
- 28) Jon Arrieta, « El licenciado Andrés de Poza y su conytrbucion a la ubicacion de Vizcaya en la Monarquía hispanica », in *La diadema del rey. Vizcaya, Navarra, Aragon y Cerdeña en la Monarquía de España*, Jon Arrieta, Xavier Gil, Jesus Morales eds., Bilbao, Universidad del Pais Vasco, 2017, pp. 169-229.
- 29) Andres de Poça (Poza), *De la antigua lengua, poblaciones, y comarcas de las Españas*, Bilbao, Mathias Mares, 1587; Jon Juaristi, *Vestigios de Babel. Para una arqueología de los nacionalismos españoles*, Madrid, Siglo XXI, 1992. 30 Juan Martínez de Zaldivia, *Suma de las cosas cantabricas y guipuzcoanas*, Fausto Arrocena Arregui ed., Excma. Diputación Provincial de Guipúzcoa, 1944.
- 30) Juan Martínez de Zaldivia, *Suma de las cosas cantabricas y guipuzcoanas*, Fausto Arrocena Arregui ed., Excma. Diputación Provincial de Guipúzcoa, 1944, pp. 25-26.
- 31) Manuel de Larramendi, *Corografía de la Provincia de Guipuzcoa* (1754), Echévarri, Editorial Amigos del Libro Vasco, 1986, p. 140.
- 32) Manuel de Larramendi, *op. cit.*, p. 298.
- 33) Manuel de Larramendi, *op. cit.*, p. 157.
- 34) Manuel de Larramendi, *op. cit.*, p. 153.
- 35) Pedro de Fontecha y Salazar, *Escudo de la mas constate fe y lealtad* (1749), Jon Arrieta Alberdi ed., Bilbao, Universidad del Pais Vasco, 2013, p. 826.
- 36) Coro Rubio Pobes, *Revolución y tradición. El País Vasco ante la Revolución liberal y la construcción del Estado español*, 1808-1868, Madrid, Siglo XXI, 1996.
- 37) Joshua Goode, *Impurity of blood. Defining race in Spain, 1870-1930*, Baton Rouge : Louisiana State University Press, 2009, p. 28
- 38) Francisco Pelayo López, Rodolfo Gonzalo Gutiérrez, *Juan Vilanova y Piera (1821-1893), la obra de un naturalista y prehistoriador valenciano*, Valence (Es), Museo de Prehistoria de Valencia

- /Diputación de Valencia, 2012.
- 39) Joshua Goode, *op.cit.*, p. 29.
- 40) Carlos Carrete Parrondo, *Los judíos en la España contemporánea: historia y visiones, 1898-1998*, Cuenca, Univ de Castilla La Mancha, 2000; Danielle Rozenberg, *L'Espagne contemporaine et la question juive*, *op. cit.*; Javier Domínguez Arribas, *El enemigo judeo-masónico en la propaganda franquista, 1936-1945*, Madrid, Marcial Pons, 2009.
- 41) Danielle Rozenberg, *op. cit.*, p. 139.
- 42) Salvador Cayuela Sánchez, "Biopolítica, nazismo, franquismo. Una aproximación comparativa," *Éndoxa. Series Filosóficas*, 28, 2011, p. 257-286.
- 43) Enrique Gonzalez Duro, *Los psiquiatras de Franco: Los rojos no estaban locos*, Barcelona, Peninsula, 2008, pp. 45-148; Alfredo Jesús Sosa-Velasco, *Médicos escritores en España, 1885-1955. Santiago Ramón y Cajal, Pío Baroja, Gregorio Marañón y Antonio Vallejo Nágera*, Woodbridge, Suffolk, UK; Rochester, NY, Tamesis, 2010.
- 44) Antonio Vallejo Nágera, "Maran-atha," *Divagaciones intrascendentes*, Valladolid, Talleres Tipográficos Cuesta, 1938, p. 95-98.
- 45) José María Ruíz-Vargas, «Trauma y memoria de la Guerra Civil y la dictadura franquista» から再引用, in *Generaciones y memoria de la represión franquista: un balance de los movimientos por la memoria*, *op.cit.*, 2010, p. 157.
- 46) Arriba, 1939年5月20日, Javier Domínguez Arribas, *op. cit.*, p. 309 および Danielle Rozenberg, *op. cit.*, p. 138. から再引用。
- 47) Luis Mariano González González, *Fascismo, kitsch y cine histórico español (1939-1953)*, Cuenca, Ediciones de la Universidad de Castilla-La Mancha, 2009, pp. 47-67.
- 48) Jon Juaristi, *El linaje de Aitor*, Madrid, Taurus, 1998.
- 49) Claude Singer, *Le Juif Süss et la propagande nazie. L'histoire confisquée*, Paris, Les Belles Lettres, 2003.
- 50) Alberto J. Leonart y Amsélem, *España y ONU: estudios introductivos y corpus documental. (1952-1955)*, volume 6, Madrid, Editorial CSIC, 1978, pp. 23-61.
- 51) Henri Lapeyre, « Deux interprétations de l'histoire d'Espagne: Américo Castro et Claudio Sánchez Albornoz », *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations*, 20-5, 1965, pp. 1015-1037.
- 52) Claudio Sánchez-Albornoz, *España un enigma histórico*, Barcelona, Edhasa, 1973, p. 241.
- 53) Claudio Sánchez-Albornoz, *op. cit.*, p. 297.
- 54) Danielle Rozenberg, « L'État et les minorités religieuses en Espagne (du national-catholicisme à la construction démocratique) », *Archives des sciences sociales des religions*, 98, 1997, pp. 9-30.
- 55) Alejandro Baer, « The voids of Sepharad: the memory of the Holocaust in Spain », *Journal of Spanish Cultural Studies*, 2011, 12-1, pp. 95-120.
- 56) Xavier Casals, « La ultraderecha española: una presencia ausente (1975-1999) », *Historia y política*, 3, p. 147-171.
- 57) *El País*, 1979年1月20日号, 無署名記事:
https://elpais.com/diario/1979/01/20/ultima/285634802_850215.html
- 58) Paul Preston « Una contribución catalana al mito del contubernio judeo-masónico-bolchevique », in *Generaciones y memoria de la represión franquista: un balance de los movimientos por la*

バスク人とユダヤ人の中でいかにスペイン人アイデンティティが人種化したか (フレデリック・シヨブ)

memoria, Julio Aróstegui Sánchez, Sergio Gálvez Biesca eds., Valence, Universitat de València, 2010, p. 259-272; Danielle Rozenberg, *L'Espagne contemporaine et la question juive: les fils renoués de la mémoire et de l'histoire*, Toulouse, Presses du Mirail, 2006, pp. 82-84.

- 59) Christiane Stallaert, *Etnogénesis y etnicidad en España. Una aproximación histórico-antropológica al casticismo*, Barcelone, Proyecto A Ediciones, 1998, pp. 70-76.

要 旨

本稿の目的は、16世紀から20世紀半ばまでのスペイン社会における人種差別的・地域的および一般的な系譜を提示することである。アイデンティティや他者性の人種概念がスペイン政治を非常に早い段階から支配していたことを理解するための議論の出発点として、特定されたバスク人のアイデンティティの事例を取り上げる。実際、19世紀後半から20世紀にかけてバスク民族主義の形成と普及の中心を占めたのは、人種差別的な声明である。本稿は、16世紀に「発明された」純粋なバスク人のアイデンティティにつながる系図を明らかにする。純粋なバスク人という構想は長期間にわたって築き上げられてきたが——その代償は反ユダヤ主義であり、ルーツは16世紀にまで遡ることができる——19世紀に再び活気づけられた。もちろん、人種差別的な側面を含むバスク民族主義の民族的・本質主義は、現代のスペイン社会でも例外ではない。バスクの事例は、スペインのナショナリズムにおける人種問題というよりより広範な問題と深く関わっている。16世紀までさかのぼる知的および制度的歴史への声明によく類似したバスク民族主義の論証は、国家の民族主義に関わる宣言と事実上区別がつかない。中世末期にスペイン王国を形成した社会政治プロセスは、宗教的、人種的、社会的規制のシステムを生み出した。カトリックの非妥協さ——血の純粋さの概念への執着、血統に忠実であり続けることへの執着、名誉の規範——はすべて、高貴な民族としてのバスク人という主張を支持し、より広義にはスペインにおける民族的ヒエラルキーの特徴となった。すなわちスペイン分離によって、イスラム教を祖先に持つユダヤ人から生まれた新しいキリスト教は犠牲者になったというアイデアが、古いキリスト教の純粋な避難所としてバスクという国家に意味をもたらすのである。スペイン民族主義形成とバスク民族主義形成という2つの現象は、16世紀から同時進行してきたのである。だからこそ、現代スペイン社会において、バスク民族主義はその必死な努力にも関わらず、スペイン民族主義と区別できないのである。同じ偏見、同じ価値観を持ち、どちらも同じ歴史的な血の純粋さという概念およびカトリックの非妥協に基づいている。

キーワード：バスク民族主義、スペイン民族主義、アイデンティティ、カトリック、反ユダヤ主義

Summary

The purpose of this article is to propose a local and general genealogy of racism in Spanish society from the 16th century to the middle of the 20th century. It takes its starting point in the particular case of Basque identity to understand how a racial conception of identity and otherness very early dominated Spanish politics. In fact, racist statements are central to the formation and dissemination of Basque nationalism in the late 19th and 20th centuries. This paper unravels the genealogy leading to the invention and invocation of a supposedly pure Basque identity from the 16th century. This conception was built up over a long period of time, at the cost was an anti-Semitism – with roots stretching back to the sixteenth century – that was reinvigorated in the nineteenth century. Of course, the ethnic essentialism of Basque nationalism, including its racist dimension, was no exception in modern Spain. The Basque case is one instance of the broader question of the place of racial issues in Spanish nationalism. The argumentative mode of Basque nationalism, much like its appeals to an intellectual and institutional history stretching back to the sixteenth century, are virtually indistinguishable from pronouncements in the rest of the country. The socio-political processes that formed the Kingdom of Spain at the end of the Middle Ages gave birth to a system of religious and racial societal regulation. Catholic intransigence, attachment to ideas of blood purity, obsession with remaining faithful to the lineage, the code of honor—these were all features that fed into the assertion of Basque universal nobility, as well as Spanish *casta* system more generally. The idea of the Basque country as a refuge of Old Christian purity only made sense because the New Christians from Jewish or Muslim ancestry were victims of segregation throughout Spain. These two phenomena had been perfectly harmonized as from the sixteenth century. That is why in modern times Basque nationalism proved to be unable to distinguish itself from Spanish nationalism in general, in spite of desperate efforts to do so. We see the same prejudices, the same values, with both founded in the same historical conception of blood purity, and the same Catholic intransigence.

Keywords : Basque nationalism, Spanish nationalism, identity, Catholic, anti-Semitism